

平成21年 6月19日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520616

研究課題名（和文）石見銀山地域における鉄生産に関する歴史地理学的研究

研究課題名（英文）The Characteristic of the Iron Production around the Iwami Silver Mine in the Edo Period

研究代表者

原田 洋一郎（HARADA YOICHIRO）

東京都立産業技術高等専門学校・ものづくり工学科・准教授

研究者番号：90290725

研究成果の概要：本研究では、江戸期の石見銀山地域における鉄生産および流通のあり方の特質とその変容について検討した。江戸中期以降、江川流域や日本海沿岸など、交通の要地に製鉄施設が立地するようになったこと、製鉄施設やその実質的な経営者は、比較的長く固定されていた一方で、公的な経営者たる「鉄山師」の多くは、多角的な商業活動の一環として鉄の生産と流通に出資した人びとで、しばしば交替したことなど、この地域の鉄生産と流通の特徴を明らかにすることができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1600,000	300,000	1900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学

キーワード：地域性，石見銀山地域，鉄生産，歴史地理学

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、以前に、石見銀山地域（現在の島根県大田市、江津市の一部、邑智郡の一部、大部分は江戸期の石見銀山御料に属していた地域）を対象として、鉱山業維持の地域的背景について検討をおこなってきた。その中で、石見銀山地域においては、地域の富裕層が、開発資金や物資の確保において重要な役割を果たしていたこと、少なくとも江戸後期には、日雇い稼ぎを日常的に行う者が地域内に多数存在し、それらが鉱山業に関わる労働にも従事していたことが明らかとなっ

た。一方、富裕層の中には、製鉄施設（鉦・鍛冶屋）の経営者が少なからず含まれていたこと、鉦・鍛冶屋は、地域内の日雇い稼人の重要な就労先のひとつであり、鉱山不況時の余剰労働力を吸収し得たことは、注目すべきであると思われた。非鉄金属生産と鉄生産との間には、技術体系や労働組織など、数多くの相違があったことが指摘されており、研究代表者も、これまでは、あえて非鉄金属鉱山を対象を限定してきたのだが、こうしたことをふまえるならば、石見銀山地域の地域性について考えるにあたっては、この地域におけ

る鉄生産と流通のあり方を無視することはできないと考えるに至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、江戸期～明治初期の石見銀山地域における鉄生産および流通のあり方の特質とその変容について検討することである。具体的には、対象地域における鉄生産施設の分布とその経営者の変遷を明らかにし、いくつかの鉄生産地の事例について、鉄の生産・流通のあり方、その江戸期を通じての変容の具体相を明らかにする。その上で、非鉄金属生産との関わりをふまえて、いずれは、石見銀山地域の地域的特質の解明に至りたいと考えている。

## 3. 研究の方法

- (1) 既往の文献の参照や現地調査を通じて、石見銀山地域における鉦・鍛冶屋の遺跡の所在や製鉄に関連する地名の分布を明らかにする。
- (2) 江戸期における鉄の生産、流通に関わる古文書資料を収集、分析する。鉦・鍛冶屋の経営については、主に中村家文書(江津市大貫)、中原家文書(美郷町潮)を利用した。中村家の史料には、江戸中期頃のものが多く含まれており、中原家の史料は、江戸後期から明治期のものが充実している。鉄生産や流通鉄の流通に関しては、泉家文書、森山家文書(以上いずれも大田市仁摩町宅野)を取り上げた。

## 4. 研究成果

- (1) 本研究を通じて、明らかにし得たことは、以下のようにまとめることができる。
- ① 既往の文献や古文書資料等によれば、鉦・鍛冶屋などの製鉄施設は、元来、砂鉄採取地域に近接して立地することが多かった。ところが、少なくとも18世紀後半以降には、大規模かつ恒久的な鉦・鍛冶屋の施設が江川周辺に集中して設置される傾向が確認された。19世紀になると、日本海沿岸部に製鉄施設が立地した例もみられた。一方で、同時期の砂鉄採取地域では、比較的小規模な製鉄施設が依然として立地する場合もあったが、どちらかといえば、原料としての砂鉄の供給に特化していく傾向がうかがわれた。たとえば、銀山御料に隣接する浜田藩領の邑智郡日貫村(現邑智郡邑南町日貫)では、18世紀初期に、銀山町、

江川流域や日本海沿岸の都市的集落から鉄の売買に関わる商人の分家や別家が移住した例がみられた。このことは、都市的集落を拠点として、鉄の生産、流通に関わった商人によって、領域を越えて原料砂鉄の確保が志向されたことを示している。さらに、その背景には、石見銀山の衰退を背景として、銀山で必要とされた物資の円滑な集荷を意識して編成されていた交通、流通網の再編成が進みつつあったことをみることができる。

- ② 鉄の生産、流通に関与した中村家は、16世紀末に毛利氏によって、日本海沿岸の港町であり、当時石見銀山の外港として繁栄した温泉津に屋敷地を拝領したという伝承を有する家で、石見銀山西隣の西田村(現大田市温泉津町西田)出身であることから、西田屋を屋号としたと伝えられている。同家は、17世紀半ばまでに、江川流域の大貫村に定着した。大貫村の周辺からは砂鉄が産出され、中村家の近隣にも鉦・鍛冶屋が設置されていたから、同地への移住は、おそらく鉄生産に関連するものであったと推測される。同家の屋号の由来となった西田村には、中世に鑄物生産施設が設置されていたこと、同家の家系図等によれば、その一流が毛利家の転封に際して萩城下に移住して、鉄商いをおこなったことなどから勘案すれば、同家と鉄の生産、流通との関連は、中世期にまで遡ると考えられる。同家はさらに、18世紀初頭には、砂鉄の一大産地、邑智郡の浜原村(現邑智郡美郷町)に分家を出し、邑智郡山間部において鉦・鍛冶屋の経営をするなどしている。もっとも西田屋は、鉄の生産、流通のみではなく、青苧の取引もおこなっており、さらには周辺に耕地も集積し、ある程度の地主でもあった。こうした多角的ともいえる経営は、後述する中原家や、本研究では直接取り上げることはなかったが、川本町の三上家、都賀本郷の石田家など、この地域の有力な鉄商人には、かなり普遍的に確認されるあり方であった。

同家文書の元禄15(1702)年「御請鉄員数帳」によれば、当時の石見銀山地域における産鉄は、「割鉄」よりも、むしろ半完成品である「銚」の状態に輸送された例が多かったことがわかる。幕末期には、代官所役人によって、この地域の主要な産品として「銚」があげられ、重くて嵩張るこのような形態で輸送され得たのは、水運の便に恵まれていたためである、といったことが述べられる状況にあったが、石見銀山地域

では、かなり早い時期から、銑の形態での輸送が行われていたことが確認された。

- ③ 中原家は、18世紀末～19世紀初頭にかけて興隆した鉄商人であった。邑智郡は、前述のように砂鉄の一大産地でもあり、山間部には多くの鉦・鍛冶屋が成立していた。中原家がいつ頃から鉄生産に関わるようになったかは正確にはわからないが、同家の史料の中には、潮村周辺に立地した鉦・鍛冶屋の経営権や、製鉄に用いるために代官所より請け負った山林の利用権を、浜原村西田屋や、川本三上家等から譲り受けたことを示す19世紀初期の記録をはじめ、製鉄施設や山林の譲渡に関する史料が多数含まれている。史料によっては、鉦を経営する権利が「株」と表現されていることもあった。こうした内容の史料は、中村家の江戸後期頃の史料にも散見され、公的な史料等には「鉄山師」、すなわち鉦・鍛冶屋の経営者として現れる彼らが、実際には鉄生産への出資者であり、集荷した銑・鉄を流通過程にのせることに主に関わる存在であったことを示すものであるといえる。それぞれの鉦・鍛冶屋は、小規模な技術者集団によって運営され、「鉄山師」が交替しても、その鉦・鍛冶屋の操業を担う、といった例も少なくなかった。また、それらが比較的長く同一の場所で営まれたことによって、周辺集落の住民が、そこにおける単純労働に就くことが可能となった。中原家文書によれば、19世紀初頭、邑智郡畑田村(現邑智郡美郷町)では、庄屋が所持していた「鉦株」が、浜原村の者へ譲渡されることを知った、畑田村の村民が、異議を唱え、訴訟が生じるということがあった。その中で、村民は「当村鑪の儀は以前より地下救の鑪」との見解を示し、最終的には、村民は鉦株の譲渡代銀の一部を得ること、新たな鉦株の所有者に対して、さらなる譲渡に際して、村民に相談を経ねばならない、という条件を呑ませることに成功している。ここからは、19世紀に入る頃には、製鉄施設が、地域の住民にとってきわめて重要な存在となっていたことを読み取ることができるとともに、石見銀山地域における鉦・鍛冶屋経営の流動性の高さを確認することができる。
- ④ 宅野浦は、日本海に臨む小さな港町である。その周辺には、温泉津、神子路浦、大浦などの有力な港町がすでに成立していたが、ここには、江戸期初頭に出雲杵築町の商人、藤間家の分家が移住したと伝えられており、石見銀山に供給する鉄道具を生産する

ために形成された町であったという説もある。本研究で史料調査の対象にとりあげた泉家は、17世紀末～18世紀初め頃に、宅野浦の旧家、泉家(屋号大西)から分家した家で、増屋を屋号としていた。同家は、自前の廻船を持ち、松江藩の払い下げ米、石見産の鉄や青苧などを自家の廻船に載せて、主に大坂や尾道で販売し、返り荷に瀬戸内産の塩や大麦等を買入れて、山陰地域で販売するという商売を営んでいた。松江藩の藩米を扱っていた関係もあつたのことで推測されるが、出雲国杵築町、久村(現出雲市多伎町久村)と頻りに商取引をおこなっている。鉄についても、石見産に留まらず、奥出雲産の鉄を、杵築町の藤間家との取引を通じて、中世以来の鉄集散地であった宇龍津(現出雲市)において買入れ、大坂で販売した事例が、同家の史料から数件確認された。泉家の廻船は、中国地方の日本海沿岸から瀬戸内海にかけての地域に留まらず、加賀や越後など北陸方面にも赴いて積極的な商取引を展開していた。

森山家は、宅野において泉家(大西)とならぶ有力者であった藤間家の番頭を務め、明治初頭に独立したとみられる家である。同家文書には、藤間家が経営した鉦や廻船に関する帳面類が多数含まれており、幕末頃には、藤間家の事業を実質的に担う存在であったと考えられる。藤間家は、前述したように、石見銀山で用いる鉄製品の確保に関わって、当地に移住したという伝承をもつ。幕末期に至るまでの、同家の事業に関わる史料は、現在のところみつからないが、泉家文書には、藤間家の分家、大坂屋が、しばしば増屋と組んで商売をおこなっている。杵築町の藤間家との鉄取引も、両家でおこなったものであった。本家は、江戸中期までに、相当な耕地を集積しているが、泉家同様、海運にも早い時期から関わっていたと思われる。また、藤間家が、温泉津村の鉦など、日本海沿岸の鉦を経営した形跡があり、幕末までには、宅野地内に達水鉦を成立させている。この鉦では、原料として、日本海沿岸の浜砂鉄に加えて、江川水運によって石見国内陸部の砂鉄、日本海海運によって伯耆国の砂鉄が用いられたとされる。鉦の立地といえば、しばしば「小鉄8里に炭3里」という表現が引かれ、原料砂鉄や燃料となる木炭の原木の確保が最優先事項であったとされてきたが、少なくとも石見銀山地域においては、流通の要地という条件が、それらに優先し

ていた。

(2)本研究における成果をさらに発展させることによって今後の解明が期待できること、残された課題については、以下のように認識している。

①見かけの経営主体が頻繁に替わりながら、同一の場所において長期にわたって、鉦・鍛冶屋が営まれるというあり方は、数々の特権を有する少数の巨大な製鉄業者へと収斂していった出雲地域とは大きく異なるものであった。従来、出雲地域の製鉄業の特徴は、松江藩の保護政策の結果に帰されてきたが、支配主体の相違のみでなく、製品や必要物資の輸送に関わる自然環境の相違、地域の歴史的背景や生活文化の相違なども、このような違いを生む要因となっており、それらがお互いに関わりあって地域の特性を作り出していたことが推測される。たとえば、石見銀山地域では比較的早い時期より、より加工度の高い「割鉄」や「鋼」ではなく、「銑」の形態による輸送が、その特徴のひとつであった。このことについては、江川による輸送の便のよさ、域内で産出される砂鉄の質が「銑」に適していたといったことが語られてきたが、さらに、石見銀山の繁栄という歴史的背景も、考慮に入れる必要があるのではないだろうか。銀山盛期には、銀山が鉄の一大需要地であり、半完成品の状態で輸送し、銀山やその周辺で、用途に応じた鉄道具を生産する方が合理的である、という時代があったのではないかと、といったことも一考の余地があるのではないかと、思われるのである。

出雲地域をはじめとする、他地域との比較ということは、本研究の課題のひとつでもあったが、申請期間中には、相違点の抽出に留まり、その背景の比較にまでは到達することができなかった。その際には、製鉄業という産業の構造に留まらず、それぞれの地域の全体構造の中に鉄生産を位置づけつつ検討することが有効であると考える。

②石見銀山地域と其周辺の日本海沿岸には、本研究で取り上げた宅野浦以外にも、大浦、温泉津、出雲国口田儀町、久村など、「鉄宿」などと称された商家が存在した港町が多数確認される。自らの廻船を有する者、他国船の間屋を務める者、とそのあり方は様々であったが、彼らはいずれも海運を利用した遠距離取引に関わるものであった。これまでにみてきたように、内陸部に居を

構えていた「鉄山師」も、さまざまな商品を取り扱った商人であり、浜原村西田屋などは、自前の廻船を江川河口部の江津湊に保有し、遠距離取引に携わっていた。このような鉄の生産、流通の主体のあり方は、石見銀山の盛期に、銀山へ多くの物資を滞りなく集めるために整備された流通構造が、江戸中期以降における全国的な商品流通網の成立と相まって、銀山が衰退する18世紀初頭以降には、銀山御料の生産物を、他地域に移出することを容易にし、地域を支えることとなったことが推測される。

③近代以前の地域構造、あるいは伝統産業のあり方について検討する際、しばしば、それらは閉じたシステム、すなわち地域内部における諸要素の結びつき、伝統産業地域に即していえば、生産、流通の諸過程の構造が自己完結的に成立していたものと想定されていたように思われる。しかし、本研究を進める中で、少なくとも資源産業について検討する際は、近代以前であっても、広域の流通、消費の状況、国家レベルの政治経済の動向を十分に視野に入れておく必要を確信した。

なお、本研究によって明らかにできたことの詳細、および重要な史料については、2009年度中に報告書を作成して公表する予定で準備を進めている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[図書] (計 2件)

- ①石見銀山歴史文献調査団 (小林准士・仲野義文・原田洋一郎) 『石見銀山歴史文献調査報告書Ⅳ 銀山諸事ニ付認書差上控』, 島根県教育委員会, 63p, 2008年3月.
- ②石見銀山歴史文献調査団 (小林准士・仲野義文・原田洋一郎) 『石見銀山歴史文献調査報告書Ⅲ 安原備中関連史料集』, 島根県教育委員会, 77p, 2007年3月.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

原田 洋一郎 (HARADA YOICHIRO)  
東京都立産業技術高等専門学校・ものづくり工学科・准教授  
研究者番号: 90290725